

良心の碑

いしづみ

聖書の言葉

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」

(テサロニケの信徒への手紙一 5章 16節から 18節)

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」(フィリピの信徒への手紙 4章 4節)

この聖句に導かれて受洗しました。それ以来、事ある毎にこの聖句を思い起こし、勇気づけられています。(片桐 陽)

6月 月例会

日時 6月6日(火) 13:30～16:00

内容 研究発表会(旅行の事前学習会)

テーマ 新島襄と徳富蘇峰そして同志社

木原康博さんの発表の中から

SHISHA TOKYO HUB



四恩堂 蘇峰は次の四人を最大の恩人として慕い「四恩堂」と呼んでいた。

(1) 徳富淇水 蘇峰の

実父。横井小楠の最初

の門下生。肥後藩の官吏となり小楠の思想を實踐した。(2) 新島襄 蘇峰にとっては同志社英学校の校長先生。(3) 勝海舟 蘇峰にとっては気難しそうな隣家の主人であったが、やがて親交が始まる。(4) 横井小楠 世界的な視野に立って日本の進路を示した肥後藩の大思想家

蘇峰の新島観 「先生は情熱の人であり、その情熱は私意私欲の為でなく、真に国家、国民の上に注がれていた。」「先生は頭の人ではなく、心の人であった。先生は山でも動かす信仰をもっており、人をも泣かせる情熱をもっていた。」「余は同志社を去ったが新島先生をさったのではなかった。」

近藤恒雄さんの発表の中から

SHISHA TOKYO HUB



バイブルクラスと下級クラス

伝道師を目指す熊本バンド出身の上級クラスはバイブルクラスと呼ばれた。下級クラスの学生は同心交社というグループを作り上級

クラスに対抗した。蘇峰と大久保真次郎は同心交社の中心人物であった。

自責の杖事件 上級クラスと下級クラスの合併問題から発展して授業ボイコットが起きた。新島は校長としてけじめを付けるために全職員・全学生の前で、杖で自分の手を打った。

自主退学 蘇峰は学生騒動の責任をとって、卒業直前に退学した。

上中一樹さんの発表の中から



双宜荘 富士山麓電気鉄道株式会社社長から昭和の初めに蘇峰に提供された別荘。蘇峰は昭和7年より避暑のためこの別荘に滞在するようになった。双宜荘は昭和30年同志社創立80周年を記念して蘇峰から同志社に寄贈された。

晚晴草堂 熱海の伊豆山にあった蘇峰晩年の住まい。蘇峰の死後売却されたが、買主より同志社へ寄贈され、山中湖畔の双宜園内に移築された。現在改装中であるが、特別に許可を得て内部見学の手配中。

福岡幸さんの発表の中から



借金の保証人 24歳

「将来の日本」で論壇デビューした蘇峰は、翌年「國民之友」を発行し平民的急進主義を展開した。28歳で國民新聞社を立ち上げたが、このとき新島襄は借金の保証人となった。しかし國民新聞創刊号が出る直前亡くなった。

大言論人 蘇峰は内閣に癒着する政界の黒幕であり、『近世日本国民史』100巻を書き上げた修史家であり、明治・大正・昭和を通じた大言論人であった。

個儻不羈 新島は「個儻不羈」なる学生を「圧束」してはいけないと遺言したが、蘇峰は新島の弟子の中で最も「個儻不羈」なる人物であった。

「徳富蘇峰 終戦後日記」 蘇峰は終戦の三日後から昭和22年7月まで口述により『頑蘇夢物語』完成させた。それは「超弩級」の現代史資料であることから『徳富蘇峰 終戦後日記』という書名で講談社学術文庫から刊行されている。

村木文明さんの発表の中から



同志社墓地墓参 昭和30年、93歳の蘇峰を蓮台に乗せて、われら熊本出身の学生が若王子山頂の同志社墓地までかつぎ上げた。蓮台には前4人、後ろ4人がとりつき、交替しながらとはいえ、体重が88kgもある大男をかつぎ上げるのは並大抵ではなかった。私はこの時熊本弁で蘇峰と言葉を交わすことが出来た。

同志社社葬 蘇峰の葬儀は昭和32年霊南坂教会で行われたが、翌年1月同志社においても「同志社社葬」を行なった。そのとき熊本出身の学生有志が有終館2階での通夜を行った。遺骨は同志社墓地に分骨した。



有終館2階での通夜 村木さん後列左から3人目
(文責：支倉 写真：江澤・木原・村木)

7月の予定

日時 7月5日(水)～6日(木)

内容 山中湖旅行

参加者には6月20日までに「山中湖旅行のしおり」をお届けします。

9月の予定

日時 9月21日(木) 午後2時～

内容 研究発表

津田道夫「小崎家アルバム」

10月の予定

日時 10月13日(金) 午後2時より

内容 講演会

八木橋康広(中部学院大学短期大学部教授・高梁教会前牧師)

『新島精神の淵源を辿る—新島七五三太と備中松山藩の絆』